

大人の予防接種

佐賀県医療センター好生館 感染制御部 部長 福岡 麻美



1 はじめに

予防接種といえば、子供が受けるものと思っていませんか？大人の予防接種と聞くとインフルエンザワクチンを思い浮かべる方が多いと思いますが、実は他にも大人が受けておくべき予防接種があるのです。この数年、毎年のように麻しん（はしか）や風しんの大きな流行が発生していますが、患者さんの多くが大人であることをご存知でしょうか。かつては、麻しんや風しんは子供の病気と考えられていましたが、現在は予防接種を受けていない大人への感染が問題となっています。大人に必要な予防接種を知り、感染症から自分自身、そして自分のまわりの大切な人を守りましょう。

2

予防接種の意義

毒性を弱めた病原体(ウイルスや細菌)や毒素を前もって投与しておくことにより身体に免疫(抵抗力)をつけ、その病気にかかりにくくすることを予防接種といい、投与するものをワクチンといいます。

ワクチンで予防可能な病気のことをVPD (Vaccine＝ワクチン Preventable＝予防可能な Diseases＝病気)といい、主なVPDには表1のようなものがあります。これらの病気は、予防接種をせずに自然にかかった場合には、まれに重篤な合併症を起したり、命を落とす危険があります。また自分が病気にかかることにより、周囲の人にその病気を広げてしまうこともあります。ワクチンで予防可能な病気は、ワクチン接種で予防するのが感染予防の基本です。



表 1

ワクチンで予防可能な病気(VPD)

- | | |
|----------------------|----------------------------|
| ● B型肝炎 | ● ロタウイルス感染症 |
| ● Hib(インフルエンザ菌b型)感染症 | ● 肺炎球菌感染症 |
| ● ジフテリア | ● 破傷風 |
| ● 百日咳 | ● ポリオ |
| ● 結核 | ● 麻疹(はしか) |
| ● 風しん | ● 流行性耳下腺炎(おたふくかぜ) |
| ● 水痘(みずぼうそう) | ● 日本脳炎 |
| ● インフルエンザ | ● 子宮頸癌
(ヒトパピローマウイルス感染症) |
| ● A型肝炎 | |

3

ワクチンの種類

ワクチンには大きく分けて「生ワクチン」と「不活化ワクチン」の2つがあります。「生ワクチン」は、生きた状態の病原体の※病原性を弱めたものです。弱毒化したとはいえず、生きた病原体を使用するため、免疫状態の低下した方に接種すると発症してしまう危険があります。妊婦にも使用できません。「不活化ワクチン」は、※病原性をなくした病

原体の一部を製剤にしたもので、感染症を発生するリスクはありません。

※病原性…病原体に病気を発症させる性質があること。

4

「ワクチン」接種の制度

予防接種の種類には、「定期接種」と「任意接種」があります。「定期接種」は、予防接種法に基づいて市区町村長が主体となり実施するもので、市区町村から案内が届きます。多くの場合、費用は公費(一部自己負担あり)で支払われます。「任意接種」は、法律によって接種が定められた予防接種ではなく、希望者が個々の判断で接種を受けるものです。多くの場合、費用は自己負担となります。

5

大人が受けておくべき予防接種

大人が受けておいたほうがいい予防接種には表2のようなものがあり、年齢やライフスタイルに応じて接種する必要があります。ここでは、代表的な予防接種について解説します。

表 2

大人の予防接種 スケジュール (20代~60代以上)

ワクチン名	制 度	種 類	20代	30代	40代	50代	60代
肺炎球菌 (13価結合型)	任 意	不活化					1回
肺炎球菌 (23価多糖体)	定 期	不活化					1回
インフルエンザ	任 意	不活化	毎年秋に1回				
インフルエンザ (高齢者)	定 期	不活化					※ ¹
麻しん (はしか)	任 意	生			2回		
風しん	任 意	生			2回		
水痘 (みずぼうそう)	任 意	生			2回		
おたふくかぜ	任 意	生			2回		
带状疱疹	任 意	生				1回	
日本脳炎	任 意	不活化			3回		
B型肝炎	任 意	不活化			3回		
破傷風トキソイド	任 意	不活化	10年ごとに1回 (小児期に未接種の人は3回)				
三種混合 ^{※2}	任 意	不活化	1回 (小児期に未接種の人は3回)				
髄膜炎	任 意	不活化		1回			

定期接種

任意接種

※¹ 毎年秋に1回

※² 三種混合:
ジフテリア・百日咳・破傷風

1 全ての年齢の大人に必要な予防接種

1. 麻しん (はしか)

感染力が非常に強く、予防接種を受けていない人が感染するとほぼ発症します。大人がかかると重症化し、肺炎や脳炎などの合併症がみられることがあります。妊娠中の感染は、早産・流産のリスクとなります。最近国内では、2018年春に沖縄で、2019年に入り近畿地方での流行がみられています。感染予防のためには、2回の予防接種が必要です。

2. 風しん

大人がかかると、脳炎や血小板減少性紫斑病などの合併症が増加します。最大の問題点は、妊娠初期の妊婦が感染すると、赤ちゃんに先天性風しん症候群 (生まれつき心臓や耳、眼に障害がある) のリスクが高くなることです。妊娠中は予防接種を受けることができませんので、妊娠前にパートナーと一緒に受けておくことが大切です。妊娠出産の年代の女性がいる家族や職場などでは、周囲の人も予防接種を受けましょう。

日本では2018年夏頃から現在まで、風しんの流行が続いています。**流行の中心は30~50代の男性で、過去に風しんの予防接種を受けていない世代です。**感染拡大を防ぐため、2019年4月より3年間、39~56歳の男性を対象に、風しん抗体検査および抗体陰性者に対する予防接種が無料化されます。生まれてくる赤ちゃんのために、是非この機会に予防接種を受けましょう。

3. 水痘 (みずぼうそう)

感染力が大変強く、予防接種を受けていない人が感染するとほぼ発症します。大人や妊婦がかかると肺炎や脳炎を合併し、重症化することがあります。また妊婦が感染すると、胎児に先天性水痘症候群を発症するリスクがあります。感染予防のためには、2回の予防接種が必要です。

4. 流行性耳下腺炎 (おたふくかぜ)

大人がかかると重症化しやすく、髄膜炎や精巣炎、難聴などの合併症のリスクが高くなります。感染予防のためには、2回の予防接種が必要です。



2 高齢者に必要なワクチン

1. インフルエンザワクチン

インフルエンザは毎年冬になると流行し、体力や免疫力が低下した高齢者がかかると、肺炎合併などの重症化のリスクが高まります。重症化を阻止するためには、予防接種が有効です。65歳以上の方、60歳以上65歳未満の一部の方は、毎年1回定期接種を受けることができます。それ以外の方は任意接種となります。インフルエンザが流行する前、11月ごろまでに接種をすませましょう。

2. 肺炎球菌ワクチン

肺炎は、日本人の死因の中核を占めています。肺炎の原因で最も多いのが、肺炎球菌という細菌です。肺炎球菌は病原性が強く、肺炎だけではなく菌血症や髄膜炎をひき起こし、生命にかかわることが少なくありません。重症化しやすい高齢者に対して、予防接種が推奨されます。肺炎球菌ワクチンには、23価ワクチンと13価ワクチンの2種類があります。

2014年10月から65歳の方を対象に肺炎球菌ワクチンが定期接種となり、23価ワクチンを1回だけ公費で接種できるようになりました。65歳超の高齢者に対しては、経過措置として年度内に65・70・75・80・85・90・95・100歳となる方も定期接種の対象となっています。経過措置は、当初2018年度末までの予定でしたが、2019年度以降も2023年度末まで継続されることになりました。前の機会に接種を忘れた方は、是非この機会に受けましょう。もう1つの13価ワクチンは任意接種で、自費で受けることができます。13価ワクチンを接種したほうがいいのか、いつ接種するかについては、かかりつけ医にご相談ください。

肺炎球菌ワクチンとインフルエンザワクチンの両方を接種すると、より高い肺炎予防効果が期待できます。これら2つのワクチンをあわせて受けましょう。

3. 帯状疱疹ワクチン

免疫力が低下して体内の水痘・帯状疱疹ウイルスが再活性化されると、帯状疱疹を発症します。50歳以降の中高齢者に多く発生し、治療後も帯状疱疹後神経痛が長期間にわたって残ることがあります。2016年3月から50歳以上を対象として、水痘ワクチンを帯状疱疹の予防目的で使用できるようになりました。



6 おわりに

予防接種は私達の命を守る大切な手段です。予防接種の後に起こる副作用が怖いと思っている人がいるかもしれませんが、実際には注射を受けた部位が赤く腫れたり、少し熱が出る程度です。予防接種をしないでその病気にかかり重症化した場合の危険の方が、ずっと怖いと考えられます。子供も大人もみんなが適切に予防接種を受けて、必要な免疫をつけておくことが、個人にとっても社会全体にとっても、とても大切です。